2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部 子ども発達学科	教授	堀 篤実
最終学歴	学　位	専門分野
金城学院大学人間生活学研究科博士課程 人間生活学専攻修了	博士 （医学、岐阜大学）、 博士 （学術、金城学院大学）	臨床心理学

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

本学の建学の精神である、「真に信頼してことを任せうる人格の育成」にあげられているように、責任感があり真面目に物事に取り組む心身ともに健全な学生の育成を目指します。

（目標）

心理学の基礎知識や心理的支援に関する知識を身につけ、子どもを取り巻く様々な問題に対し、心理学の視点を持って対応できる能力を高めるようにする。同時に、自己理解・他者理解を深め、少子高齢化社会を支えて社会で活躍できる保育者・教育者を養成することを目標とする。

（方針）

授業において学生に対し各科目の専門性として必要な知識や技能を教授することに加え、授業時間外に、学生対応等を通して、教育をしていく。

（計画）

学生が各分野の知識や技術を習得でき、一人ひとりが成長感を感じられるわかりやすい授業を目指す。また、講義科目においては課題提出時のコメントを活用し、毎授業後、学生に振り返りを促すとともに教員の側からもコメントを記載し双方向を心がける。さらに、学生からのコメント等を活用し、学生が興味関心を持った内容や疑問を持った内容に関しては学びを深める授業内容を組み込み、授業を展開していく。演習科目については学生のコミュニケーション能力やソーシャルスキルを高められるよう、可能な限りグループワークを組み込み体験させる。また、専門演習では、学生が自ら問題意識をもってテーマを設定し、その解決方策を探求することに努めて研究を進め、その成果をまとめてプレゼンテーションできるようにする内容を取り入れ、さまざまなアクティブ・ラーニングを展開する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

発達心理学、子ども家庭支援の心理学、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

教育心理学、教育・保育相談、精神疾患とその治療、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

2022 年度は対面型授業を実施することが可能となり大半の授業を対面で実施した。各分野の知識

や技術の習得を目指し、対面での授業を展開しつつ Teams の機能を使用し、学生が成長感・達成感を感じられる授業を目指した。講義科目においてはパワーポイントを使用し教育的効果を高める授業を展開することによって、学生の学習意欲を刺激し興味・関心を高め知識を習得させるための努力をした。学生の理解度を高めるため、授業に DVD などの教材の導入、グループディスカッションを効果的に取り入れた。専門演習Ⅰ及びⅡではカウンセリングの基礎知識や技術の習得のための演習を実施し、学生のカウンセリングマインドを高めるとともにピアヘルパー（日本教育カウンセラー協会認定資格）の取得をサポートした。2022 年度は所属する演習学生全員、ピアヘルパー筆記試験合格（そのうち２名が協会長賞を受賞）に導くことができた。また、専門演習Ⅲ及びⅣでは個々の学生の研究テーマに沿った研究及びその研究のプレゼンテーションの指導をした。新型コロナウイルス感染状況を鑑みて卒業研究発表会は実施できなかったものの、自らの研究の発表の仕方を身につけさせることができた。

○作成した教科書・教材

授業ごとにオリジナルの教材を作成した。また、発達心理学（幼・小）、子ども家庭支援の心理学、教育心理学（幼・小）、精神疾患とその治療においては振り返りシートを作成し、専門演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳではワークシート、振り返りシートを作成した。

○自己評価

講義科目においては学生のニーズを感じとるため、「学習のあゆみ」という用紙に毎回、授業の感想、意見、質問を書いてもらい、それに対して教員がコメントを書き加え次回の授業で返却をした。講義形式の授業ではあったが、学生、教員の双方向でのやり取りを心がけた。また、全体で共有したほうが良い意見や質問をやり取りしたときは授業内で取り扱い、授業の内容を膨らませ他の学生とも共有した。演習科目においてはグループワークを積極的に取り入れ、より具体的、体験的授業を試みた。また、専門演習Ⅰ、Ⅱの受講生には積極的にピアヘルパー筆記試験の受験を促し、合格へと導いた。これらの結果、当初の目標・計画については、概ね目標を達成することができた。

しかしながら、学生の授業評価において「授業の到達目標」に関する項目で平均より評定が低かった。受講している学生たちがその科目の到達目標を理解していなかったことに加え、私からも授業内で学生にその授業の到達目標をうまく伝え切れていなかったことによるものと考えられる。これについては今後の課題として学生にとって理解しやすい授業を心がけ、学生にとって学びの多い授業となるよう、さらなる授業研究をして改善していきたい。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

１．コミュニケーション能力及びカウンセリングの基礎知識を生かすことのできうる保育者、教育者の養成

２．自然体験や表現力の育成と自己肯定感、レジリエンスの関連の検討

○目標・計画

研究課題１

（目標）

・学生のコミュニケーション能力を高める要因や背景を探ることにより、よりよい人間関係を築き他者から信頼される人格を形成できるようにする。

・可能な限り、地域諸機関での経験学習に参加できるような場を設定し、学生の成長・発達を促す。
・カウンセリングの基礎知識や技術を習得することにより、保育や教育の様々な場面で援助・支援することができるようにする。

（計画）

コミュニケーション能力の向上に関与する要因の検討をするとともに、保護者の様々なニーズや相談に対応できる保育者および教育者になるために、学生のソーシャルスキルについて検討する。ピアヘルピングに関する資格取得を希望する学生に、カウンセリングの基礎知識やカウンセリングマインドについて勉強会を開催し、資格取得を支援する。また、学生のカウンセリングマインドを高める支援をすると同時に、カウンセリングの基礎について学んだ学生のソーシャルスキルについて学習の前後で調査を実施し、ソーシャルスキルの修得やその傾向を分析する。

これらの結果をまとめ、学生が教育・保育相談に活かすことができるよう、教育カウンセリング学会などで発表をするとともに論文にまとめ学術誌に発表する。

研究課題２

（目標）

・自然体験や表現力を育成する体験と自己肯定感やレジリエンスの関係について解明し、学生の自己肯定感やレジリエンスを高める。

（計画）

子どもと関わる現場が抱える課題は，複雑化・困難化するだけでなく、多様化している。現在、子どもと関わる職業に就く人には様々な資質能力が求められている。その中でも子どもの身近にいる大人が自己肯定感を高めることや、様々な形で表れる子どもたちの表現の芽に柔軟に対応するためには保育者・教育者自身の豊かな感性が不可欠である。また、同時に保育者・教育者自身が豊かな表現力を身につけていることも重要である。そこで、保育者や教育者を目指す学生が、自然体験をすることや主体的かつ協働的にグループワークやディスカッションに取り組み、演劇の創作体験をすることで、表現力に関する自己認知や自己肯定感やレジリエンスにどのような影響を及ぼすのか検討する。これらの結果をまとめ、保育や教育、心理関係の学会や学会誌に発表する。

〇2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・若林愼一郎、肥田幸子、堀篤実、清水紀子、鈴木美樹江、吉村朋子、松瀬留美子、八木朋子、伊藤佐枝子、地域創造研究所叢書 26 号『子どもの心に寄り添う今を生きる子どもたちの理解と支援』唯学書房、2016、担当部分：第 1 章乳幼児期から気になる子どもの発達支援、1-18

（学術論文）

・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「就業困難が予測される学生の支援のための就業力尺度作成の試み」、健康レクリエーション研究、第 16 巻、2020、1-12

・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「自閉症スペクトラム障害傾向を有する学生のための「見通し力」尺度作成の試み」、日本学生相談研究、第 37 巻第 1 号、2016、27-36

・堀篤実「気になる子どもたちへの早期発達的援助の試み」、東邦学誌、第 44 巻第 1 号、2015、165-174

（学会発表）

・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹枝「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（２）－尺度の再

検査信頼性と妥当性の検証―」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日日本教育心理学会発表論文集、478 頁

・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹枝「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（１）－項目の作成と信頼性の検討―」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日日本教育心理学会発表論文集、477 頁

・鈴木美樹枝、肥田幸子、堀篤実「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（３）－見通し力が就業力に及ぼす影響―」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日日本教育心理学会発表論文集、479 頁

・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹枝「見通し力尺度作成の試み（２）－尺度の信頼性と妥当性の検証―」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日日本教育心理学会発表論文集、572 頁

・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹枝「見通し力尺度作成の試み（１）－大学生を対象として―」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日日本教育心理学会発表論文集、571 頁

・鈴木美樹枝、肥田幸子、堀篤実「見通し力尺度作成の試み（３）－AQ 下位尺度が見通し力に及ぼす影響―」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日日本教育心理学会発表論文集、573 頁

・白井克尚、柿原聖治、鈴木順子、堀建治、堀篤実「幼小接続を見据えた森林環境教育を担う教員の養成　―教育学部総合演習におけるﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸを通じて―」初等教育カリキュラム学会第７回大会 2023 年 1 月 8 日

（特許）特になし

（その他）特になし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし

○所属学会

日本心理臨床学会、日本家族研究・家族療法学会、日本発達心理学会、日本精神分析学会、日本教育カウンセリング学会、日本教育心理学会、日本学生相談学会、日本健康レクリエーション学会、日本保育学会

○自己評価

保護者のニーズに対応できる保育者・教育者を養成するため、学生の必要とされるソーシャルスキルやキャリア形成について継続的に調査している。また、専門演習でカウンセリングマインドについて学んだ学生には、その習熟度を測るため、資格取得と習熟度の関係について調べた。継続的に研究を重ね、コミュニケーション能力及びカウンセリングマインドをもつ保育者・教育者の養成とキャリア形成に取り組んできた。しかしながらコロナ禍で活動が限られた。これらの結果について関連学会等で発表するには至らなかった。次年度以降も検討を重ね、関連学会で発表していきたい。

自然体験や表現力を育成する体験と自己肯定感やレジリエンスの関係については、データの収集をすることができたが、それらの結果を分析し、今年度、関連学会等で発表するには至らなかった。自然体験に関する活動内容については、初等教育カリキュラム学会大会において発表することができた。次年度以降は、自然体験や表現力を育成する体験と自己肯定感やレジリエンスの関係については、関連学会等で発表するには至らなかった。次年度以降も研究を継続し関連学会で発表していきたい。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

学部・所属委員会や学生相談に関与し、役割を果たすことを目標とすると同時に大学運営に貢献する。

（計画）

学部長として、教育学部の運営や学生の教育に積極的に関わり、「真に信頼してことを任せうる人格の育成」に努めるとともに、学生たちが自ら考え、互いに学び合える環境づくりに努める。委員会関連では、積極的に委員会活動を実施していく。また、各委員会では、委員の一人として、自覚と責任を持ち、大学運営に関わっていく。

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、保健・学生相談センター運営委員会、自己点検・評価委員会、人事委員会、人権問題・個人情報管理委員会

○自己評価

学部長としての業務と同時に複数の委員会に所属し、学部運営業務全般ならびに委員会活動を行った。

教育学部長として、ブランディングに基づく教育活動の具体化、キャリア教育の充実、地域連携、出口の強化などに取り組んだ。2022 年度は新型コロナウイルス感染禍でサービス・ラーニングを含む地域連携などを模索し前年度と比較すると活動ができたものの、感染の拡大状況に合わせて変更し実施した。実践型重視の教育は検討したものの実施が不可能であった。今年度のことを踏まえ次年度以降、より充実した教育を実践していきたい。学部執行部メンバーとは対面、meet を活用し連携強化を図るとともに学部教員とも連携し全般的な学部運営はおおむね計画通り進行できた

保健・学生相談センター運営委員会副委員長としては委員長や各インと協力のもと、事業計画として、学生保健相談機能ならびに設備強化に取り組むとともに、委員会重点課題として、(1) 新型コロナウイルス感染対策（予防・情報把握・環境整備）、(2) 学生状況の把握及び情報共有、(3) 合理的配慮支援及び特性のある学生支援の充実、(4) 保健・学生相談センターの運用に取り組んだ。

この他、幼小保課程部会、自己点検・評価委員会、人事委員会、人権問題・個人情報管理委員会では委員長主導のもと委員の一人として、委員会活動に貢献した。

以上のことから概ね目標を達成することができた。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域社会の人々のメンタルヘルスの向上や発達障害の研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動に努める。また、地域に対する本学のクレドに基づき、地域との連携・貢献を目指していく。

（計画）

臨床に加えて講演などの社会啓発活動を積極的に行う。発達障児・者のグループ活動にディレクターとしてかかわり障害児・者を支援するとともに支援者の養成にもかかわっていく。また、名東区子育てネットワーク連絡協議会の一陳として、地域に貢献して行く。

○学会活動等

日本健康レクリエーション学会理事　2016 年 11 月～現在

日本健康レクリエーション学会査読者　2019 年 4 月～現在

○地域連携・社会貢献等

NPO 法人アスペ・エルデの会　ディレクター　2003 年 4 月～現在

名東区子育て支援ネットワーク連絡会委員　2020 年 4 月～現在

○自己評価

NPO 法人アスペ・エルデの会ディレクターとして、発達障がいの子どもたちとかかわり自立支援に努めるとともに、学生ボランティアの指導をする予定であったが、コロナ禍で活動は縮小された。また、日本健康レクリエーション学会の理事ならびに査読者として学会の発展に貢献した。さらに、名東区子育て支援ネットワーク連絡会の委員として名東区の子育て支援、大学や学部の地域連携に貢献することができ、概ね目標を達成することができた。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

最新の技術や知識を習得するため、積極的に臨床心理学会や学生相談学会、発達心理学会、教育心理学会など心理関連の学会の研修会や学会発表に参加をしていく予定であったがコロナ禍で坂化できないものもあった。また、教育相談や発達心理学に活かすべく心理療法を学ぶため臨床心理士の定例研修会や心理相談の研修会には、複数回参加できた。さらに臨床家としての技術を高めるために、継続的に学んでいる精神分析をはじめとする心理臨床に関するセミナーに積極的に参加をした。これらから得られるものを学生に教授し、対人関係力や探求心などの能力を有した学生を養成するとともに、自分の習得した知識や技術をより確実なものとした。

Ⅵ　総括

教育学部長学部の学部長を引き受けて 3 年目に入り、学部運営ならびに全学的な視点にたった学務及び教育の遂行を心掛けた。教育学部の独自性の発揮や他大学教員養成や保育士養成の学部との査閲化を図るため、学部内教員や関係職員の意見を取り入れて、それを学部のビジョンに反映させることを目指した。今年度は 2025 年度カリキュラム改変に向け検討を行い、方向性をつけることができた。

教員としての研究テーマは教育・保育職における子どもおよび保護者の心理的支援である。これは次世代育成支援の一つであり、子どもたちの未来へつながる重要な研究であると考えている。また、本学教育学部が特色としている表現力豊かな教育者保育者養成のための要因の検討は、研究を始めたものの、コロナ禍で研究活動が限られることが多かった。2023 年度はこれらの研究および活動にさらに積極的にかかわり、大学の教員として邁進していきたい。また、大学・学部、学園の飛躍を目指し、さらに貢献したい。

以　上